
転生者の戦記（旧名も無き詩の戦記）

模造堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者の戦記（旧名も無き詩の戦記）

【Nコード】

N5895Z

【作者名】

模造堂

【あらすじ】

とある天命をまっとうした技術屋は死後、仙人のような人物に会い、とある惑星に転生する、しかし生まれてみれば希少人種の妖狐のハーフだった、うまれてから戦国時代とは知らず、ひたすら好きな物を作ってそして成人すると姉を頼ったそれから運命の歯車が変わり始めた、大陸はどうなるか、かれ次第で未来は変わったといわれる程の功績を立てることになる。

チートではありません、有る意味繋がりのある作品からの転生です。

第一章（前書き）

とある物語の人物の死後です、一度作ってみたかった物語です、どうぞよろしく

誤字、脱字がありましたら感想でのご指摘をよろしくお願いします

第一章

名も無き詩。

序章

死亡した元技術者、様々な技術に精通した裏家業の技術屋だった。名前はクロード・セバン・ロハン。

「惜しいのう」

いきなり声が聞こえたいまさらながら老いて死んだことに悔いはない。

「御主の功績を称え、これを渡しとある惑星に飛ばしてやろう」

小さな宝石だったが、食べるとジュスチャーしてくるので丸呑みした。

そしたら知識の本流が流れ膨大な知識が頭の中を巡りまくった。

第一章元服まで。

気づけば赤ん坊だった、九つの尾を持つ九尾の狐が母親で、現在は姉が生まれてから二年ほどだろう。

久慈と名づけられ、久遠家の末っ子として生まれた。

三歳で文字、学問を学び、剣術も習ったが才能はなさそうだ。其れでも必死に学び五歳のとき馬の尿とヨモギでそれは量産し改良を加えエーテルとアルコールを混ぜ合わせられるゼラチン化された綿火薬から作られていた。ローラーに通して薄いシート状に形成し、破片状に切断して使用する。安定性が高く、湿気に強く、母親より褒められた。

発火金が内蔵されている雷管の形式。雷管を交換すれば発火金も交換する事になるため、後に、雷管本体と発火金が別体となった村田銃用の村田1号雷管が発売され、その後に発火金一体型の「はやぶさ雷管」や「コダマ雷管」等に移行していったが後の話だ。

ボルトアクションボルトアクションライフル小銃は、手動で遊底（ボルト・薬室に弾を送り込み、薬室後部を閉鎖する部品）を操作し、薬室の閉鎖・開放を行う火器のことである。

ボルトアクション機構はこの大陸では僕により発明され、手動でボルトを操作して装填するため連射速度は遅いが、堅牢単純な構造かつ製造コストの安さで高い信頼性と命中精度を有した。

母親は驚いたが何度も失敗した経緯もあり、少し頭の良い子供と思っただけで、久しぶりに遊んでもらった。

母親からあまり鉄砲を作るなど言われたが、練習の為に毎日試射する。

学問を教え終わった八歳の頃、ボルトアクションライフルを背負い、山で狩をして狩猟生活を送っていた。

集落で子供は僕一人で、全員が教師のように物事を教えたが、母親ほど学識に優れた者は居らず、村の生活を良くするために農具を考案し普及させた。

集落の者もライフルに興味を持ち試してみると好評で、それぞれ担当した弾薬作り、ライフル作りを決め、半年後とに交代して技術の浸透を図った。

剣術の才はないが、母親との鉄砲の競い合いには負けなかった。

火縄とは比べ物にならない距離、命中精度、威力、連射性、手軽な装弾。

母親は悔しがったが、ボトルアクションに切り替えた。

それからは銃技の比べが始まり祭りになった。

季節ごとに祭りがあり、半年毎に交代があり、山で猟師になる者も増え始め、冬場は猟師で春からは農業を行なうものが普通になってから、二年が過ぎた。

十歳のとき姉が居ることを知った、双子で、片方は父親の元で育て、片方は母親の元で育てられた。

それが僕になる、本来双子は忌子と言われるが片方を引き離したので、偏見の目で見られることはなかった、そして母親の狐音から厳

重に口止めされた。
真孤という名の姉らしい。

そんな幼少期を過ごし、十二になる、十五になれば成人で家を持つ必要がある。

それを察したのか、猟に専念させてもらった

一つの家庭で女の子が生まれ、名前を琴音と名づけられた。
不思議なことに成長が早く僕が十三頃に五歳の体になり、よく遊んだが猟の日もあったときは不機嫌だったのが、この子の性格を現している。

精神的にも早熟で遊びながらも、家事を手伝うなどまさに女の子だった。

家にもよく出入りしては怠惰な母親の変わりに食事の準備などをしてくれたとてもよい子だがなんとなく嫌な予感がする。

僕が14歳になるときその子は十歳の体つきになり精神的にも成熟していた。

何と無く嫌な予感的中した。

「何でしょう母さん」

「琴音がお前の婚約者だ」

「うすうす気づいていたのですがさすがに三歳児は」

「安心しろ、婚約者と言うわけだ」

全く安心できないこれならイタチを信じたほうがマシだ。

しかしながら婚約者と言うことは決定で僕は十五になるとき姉を頼った。

第二章会戦と国づくり

第二章会戦及び国づくり。

「お主が弟とはな」

「どうなさいます殿」

「何にか特技はあるか」

「銃製造」

「銃製造の全権を与える、やってみよ」

「ありがとう姉上」

まずは火薬を無煙火薬に変え、ボトルアクションライフルの為に雷管を持った実包を作り、それに頼らずコルトのピースメーカーを作った。

姉は大変喜び、鉄砲兵の指揮権を委ねられ、技術は担当者の任せ技術は常に挑戦だと話した。

鉄砲兵の様々な訓練で鬼と呼ばれた、しかし、後に彼らを救うこと人なるとは思わなかっただろう。

鉄砲兵を猟奇兵と名前を変え、投擲用の手榴弾まで与えた。

副官は傭兵でウィラーと言う元提督まで上り詰めた天才、眠たげな顔がトレードマーク

そのウィラーが提案した大砲はカノン砲で以下説明する

カノン砲は（同口径の）榴弾砲と比較して、砲弾に緩焼性の比較的高い多量の装薬を用い長砲身のため射程や低伸性に優れるが、射撃時の高い腔圧や大きな反動に耐えるために砲自体の重量は重く仕上がり、サイズも大きく機構も複雑となり生産性や運用性に劣る。カノン砲が主用する砲弾もあくまで榴弾・破甲榴弾・尖鋭弾（遠距離射撃用の榴弾）などであるため、近現代においては使用砲弾の差異

によって榴弾砲とカノン砲とが区別される訳ではない。

榴弾砲と異なり高初速で弾道が低伸性に優れるため低仰角（概ね射角45°以下）での遠距離射撃を得意とし、近中距離の目標を直接照準・零距离射撃で砲撃することも可能でもある。そのため敵に射撃位置が察知されにくく、しばしばゲリラ的戦術による砲撃に用いる。

それを作るのに一苦勞、作れば品質管理を厳格に行わせ、生産に入った。

姉の真孤は自由經濟を推し進め、無能な上級武士を引退させ徹底した実力主義を明確に打ち出した。

それからは有能な人材が登用され、姉に学問を教える寺子屋を提案し了承され、ウィラーと共に教科書を作り、この大陸では初めての鉛筆を作った。

獵奇兵の訓練、演習、指揮官の育成、1個連体規模の軍人の育成を行なって、歩兵、騎兵、砲兵の三科を作り、姉に運用法を提出した。

軍事改革で階級制、士官学校の建設、大学の建設、屯田兵の考案から軍事力はうなぎ上りだ。

蒸気機関を発明し、内燃焼機関を作り、車を始めて作った。大きな川だが、水軍を作り帆船を作った主にガレオン船を。

五年間必死に活躍して、ウィラーも正式な武將に昇格した。

第二章

千華朝廷との緊張関係から会戦になり、今までの集大成になる。

今では歩兵、騎兵、砲兵、衛生兵、軍医など近代的な軍隊に成長していた。

幸い数で劣っていても兵器の質が違う平原だ。

朝廷軍五万、久遠家一万。

歩兵はウィラーに任せ、騎兵は新しく士官学校から卒業した秀才の平田、砲兵に僕と言うわけ。

「作戦会議は？」

「本隊が囃になり我々1個連体が奇襲する作戦になる、地図で言う
と」

この五年間で千華の地図は出来上がっている、姉が喜んだが、僕としては戦争が無いほうが良かった。

「なるほど難儀です」

「早速始めるぞ」

1個連隊を率いて敵軍の後方に回り込み、敵軍が本隊の撤退にあわせ突撃してくるので、その後方からカノン砲の砲撃を開始した、それが切欠で本隊も反撃に出る。

挟み撃ちになり敵軍が後方まで近づく頃には3万に減っており、本隊の歩兵と騎兵に追撃を受け、砲撃はないが歩兵がボトルアクションライフルで連射していた。

3万から五千に減ったところで騎兵を突撃させ殲滅した。

そのまま京に上り、天皇より朝廷の解散が決まった。

そのまま千華の武家に降伏を促し、従わない場合は軍隊を率いて落とした。その為、鬼清孤と言われた。

そんな頃に狐音、琴音がやってきて大騒動、二人の実力は政治手腕から技術手腕で認められ久遠家の一人が増えた、琴音は俺付きの幕僚。

真孤は強力な中央集権体制を確立し僕は国鉄、国保、国有郵便局、寺子屋から中等部、高等部、大学を提案し了承され、飛び級を公認した。

身分を制定し久遠家筆頭の国主、村々、町々を治める領主、残りは平民。

平民でも実力次第では士官学校に入り武将になれる。
大学を卒業すれば学士になれる。

そんな国になった。

朝廷を滅ぼし一年目各町々を回る国鉄のレールが敷かれ、蒸気機関が走るようになって街道が整備され、国鉄の運用が始まって公務員が法により作られた。

行政の文官、医者、様々な近代的な役職、職業が生まれていった

農業などが最大の産業で、工業なども増え始めている、商業などは増える傾向にあるが少ない。

二年目で国主会議が開かれた、方針は関東を統一することだ、それには水軍の強化が必要で半年掛け、ウィラーを提督にしたガレオン艦隊を創設した。

同時に海軍陸戦隊を作りニアス王国に降伏を迫った会議では攻めれば言いと議論されたが、少数種族を保護する観点から条件付降伏を取り付け、ポリティカルゲームは苦手だけど外交官として説得し始めての大名家が生まれた。

貨物を搭載する部分の構造は梁の種類によって大きく異なるので分類の欄で示す。大物車の走り装置の部分は多くの台車で構成されており、それらを組み合わせるうまく荷重を分散させ、また機関車の牽引力を伝達できるような構造になっている。

搭載する荷重が増加すると、車軸を増やして1軸あたりの荷重を線路が耐えうる範囲に収める必要がでてくる。このことから当初は2軸よりも多数の車軸を備えた多軸台車が設計されて用いられた。しかし多軸台車では曲線を走行する際に一部の車輪のフランジがレール

ルに強く当たることが問題となり、次第に複数の台車を組み合わせた方式になっていった。

複数の台車を組み合わせた方式では、曲線走行時に複数の台車間の位置変化を吸収するために、台車と荷受梁の間に中間の構造が設けられている。この構造を枕枠と呼ぶ。枕枠には下部に台車の心皿と組み合わせられる部分があつて荷重を伝えながら台車と枕枠の相対的な回転運動を許容しており、また枕枠の中央部分に荷受梁の荷重を受けながら相対的な回転運動を許容する心皿がある。

さらに台車が増加すると、枕枠と台車の間にもう1段階の構造が追加される。これを台車上枠と呼ぶ。台車上枠の下部には台車の心皿がきて、また上部には枕枠を支える心皿がある。台車上枠を備えた大物車でも、枕枠の下部のうち一方は台車上枠に荷重を伝えるが、もう一方は台車に荷重を伝える構造のものもある。

心皿は、梁や台枠と台車の間で荷重を伝達しながら回転を許容する仕組みになっている。しかし車種によっては、荷重を伝達する部分と回転中心を別に持つような構造になっているものもある。

連結器は、台車上枠があるものでは台車上枠に、台車上枠がなく枕枠があるものでは枕枠に、枕枠がないものでは台枠に取り付けられているのが一般的であるが、中には台車枠に取り付けられているものもあった。機関車からの牽引力の伝達はきわめて複雑であり、心皿の浮き上がりや脱落が発生したり、蛇行動やローリングを引き起こして輪重の不均等から脱線を引き起こしたりする問題がある。こうした問題に対処するためにローリング抑制装置が設けられていたり、設定最高速度が制限されていたりする。

それを再現し久遠家は現在の技術の水準は最高峰に有る。

攻略は容易で関東地方統一に三ヶ月もかからなかった。
ドワーフと虎戸が争う田府に攻め入り、半年経ちながらも攻略した。
統治地域が広がり、体制の改変を求められた。

様々な議論の中で半立憲君主制を提案した、簡単に言えば当主が権力を持ちながらも議会を開き、立法する、そんな事を君主が認めるかを判断する憲法政治。

半分は国民の手に、半分は君主の手にそんな感じで始まった国づくりはいち早く大勢力化に成功した久遠家だから可能。

「姉さん」

「何だ」

「死んだ人浮かばれるかな」

「浮かばれるように政治をするのが我々の義務だ」

「母さんはよく昼寝しているけど」

「一人なら苦労だ、三人なら楽勝だろう」

「そうだね」

「さすがに八歳児は不味いから十五になれば結婚するといい」

「姉さんもいい男見つけなよ」

「その内な」

第三章砂漠と陶土

第三章砂漠と凍土。

国の形が出来てから八ヶ月、二十二歳になった、琴音はやっと十歳、母さんは言わないで置く。

姉さんも相変わらずでウィラー提督は艦隊を率いて内海で奮戦中。

元帥は姉さんで陸軍大将に母さんが、中將に僕が、少將に獅子勝元、准將朱鷺 四秀、大佐芦矢 秀光がなった、他にも降伏した武將が陸軍海軍にそれぞれ地位を与えられた。

ウィラー提督は大将になり、本人は領地を返上した。

変わりに軍団許可を貰い陸海共同の研究所、開発所、生産工場が作られていった。

西の砂漠では部族間の問題を解決し、サラ・アッデーンが当主となって病態だそうで、弟のサラ・デインが指揮を執っているらしい。

僕はその砂漠の統一の為に軍団を率いて乗り込んだ、意外にもサラ・アッデーンは降伏し、協力的な立場を崩さなかった。

おかげでヴォルテ国との戦いは優位に進んでいた。

ヴォルテ国には火器は無い、精々弓程度、飛距離からボトルアクションに押され大砲もあり次々と拠点を失っていた。

最後に砂漠のきたがわ、ヴォルテ国の最後の砦を落とし、首都に迫ると国王は毒殺されヴォルテ国は滅亡した、砂漠を統一し、その石油資源から軍用目的に開発が行なわれた。

帆船から蒸気機関船になり。

逃れてくる難民を受け入れ代わりに屯田兵に土地を与えた。

そして魔導師が魔導師育成学府、研究学府を建設し、法律的に定められた範囲内で研究と育成が行なわれ始めた。

砂漠を取り込んでから外洋貿易も行い、貿易産業も活発である。

工業的には自動車産業が活発でそれが元になり戦車が生まれた、どちらかといえばスウェーデンのバルカンのワンマン戦車に似ている、同時に対戦車ライフル、対戦車バズーカが生まれ、ボトルアクシオンから機関銃に切り替わった。

狙撃兵も現れボトルアクシオンライフルは残って改良されていた

ニアス王国を除き統治下に入った領地の全部を足すと110万ゴールド、一ゴールドで一家十年は質素ながら生活できる金額だ、日本円で数兆円に上る。

貿易産業にも投資して外洋貿易船団を作り異なる大陸と貿易をしている。

琴音が一村一品政策を提案し、現在実行中。

現在の問題は火薬の生産が間に合わないことだ、蓬があるわけでもないために、硝石を掘削で手に入れるか、民家の床下から回収して生産している。

一応用心の為に飛行機計画をスタートさせている、それにより全く別の戦いが生まれと思う。

それに対する対空砲の開発もスタート段階だ。

「清孤中将、君主からシラーを統一せよと」

「致し方ないね、輸送船と護衛艦の造船を急がせるよ」

「今は慢性的な人材不足ですから」

「資源が有る分優位だよ、シラーは鉱山しかない上に旧兵器で作られているからね」

「そうですね、では失礼します」

部下が下がり、代わりに中佐の琴音が入ってきた軍団幕僚長になっている。

「飛行機計画、対空砲計画、潜水艦計画は途中、護衛艦計画は完了して造船か、なんか時代が違うわ」

「むしろ相手方も知って対抗策を練ると思うよ」

「それを考えるのが幕僚の仕事、報酬にカフエね」

「影ながらありがとう」

「どういたしまして」

少し会話して部屋から出て行った、砂漠の民が好む珈琲を飲みながら、かつて幼き頃を思い出した、よくよく考えてみれば不自然な子供だったと思う。

集落の故郷の人々は大丈夫か

母親は大丈夫か

姉は元気だろうか

そんな事を思い、戦乱の世の終わりを祈る。祈る対象がなくても祈ってしまう。

今亡き人々へ。

722年十二月の日だった。

翌年建造が終わり、シラー帝国の内乱につけ込み、海路を使い湾岸

を強引に入り、四万もの兵が上陸した、レールも無く、戦車も無い、対戦車ライフルや対戦車砲、機関銃、リボルバー、サーベル、何の時代の装備か分からないほどこっちゃだ。

「寒気作戦開始」

東に1個連隊の混成連隊、西部から北上する本隊。

ピーゴック、エキモを攻略すると同時に護衛艦でポプラを包囲する、完全に落とすまで砲撃を続ける予定だ。

そんな訳で任された混成連隊を二箇所到一个ずつ送り込んだ。残る二万五千は予備。

僅か一週間で二箇所は降伏し、数船の捕虜が出来、捕虜収容所が建設された。

ポプラを攻略し歩兵1個連隊を守備に置き、捕虜収容所の監視に当たった。

ワール、ケットを破竹の勢いで攻略し、シラー帝国との接点に着いた。

話し合いが持たれシラー統治の役職に就けるから降伏せよと迫った、相手も引かず、願い時間を要した、正統シラー帝国は軍門を下り、貴族階級は無くなり、代わりに領主になった。

港町は基本的には直接統治だが、正統シラーに配慮して領主を置いた。

一気に進軍し三万五千の内補給線から二万五千、シラー統一連合に護衛艦の砲撃で旧首都は陥落し、それを皮切りに南、東に分かれて進軍し、統一シラー連合という貴族派を殲滅した。

問題は戦乙女騎士団が守るフェンリルには入れず、不戦の外交関係を持った。

シラー地方に一万の兵を残し、旧首都を拠点に技術の浸透、制度の適応、法律、国家制度を浸透させ、3万の兵を故郷に返した、装備品は輸送船で持ち帰る。

軍規がしっかりしているために、問題は少なく、シラーも一年居れば非常に変わった半分が国民の手により、自らの努力で出世できるからだ。

それからも続けようと思ったが、自由都市攻略の命令が下った。

シラーで募集したが集まらず、旧正統シラー帝国の党首レインが呼びかけると五万の兵が集まった、それぞれ訓練を施し、それに三ヶ月掛かり、ツブリクリンに一万、ポーチに一万、ツヘイルに一万を置き、不戦を破棄した知らせが届くと侵攻作戦が始まり、容易く攻略できたのは、守る箇所が多すぎて兵力が分散しすぎたのが敗因これで国鉄事業が完全に通じ、レインに予算を出し灌漑事業、酒造事業、鉱山開発事業に当ててもらい、外洋船を建造する資金も渡した。

レインは苦笑して受け取った、百年の敵に褒められたようだと呼びかけの礼だと言った。

直ぐに明への侵攻作戦が練られた、補給線の心配は無く、貿易、交易が活発になり、一村一品政策が効果を挙げ始めたようだ。

まだ本格的な戦いの経験の無いまま、大国とぶつかるようになってしまったことが、悔やまれる。

第四章統一と異変

第四章

明の侵攻作戦が完成するまで半年かかり、合計六万の結集し、大将の軍団が結成され、現在明に向かいドワーフ、虎戸、田府、農民一揆を攻略中、一気に四勢力と戦うのはそれらが連合を組んだからだ。それに首都に近いために補給の心配も無い

そんな訳で明への侵攻は先送りされ、侵攻計画が一からやり直し。明の兵力は五十万、こちらの三倍近い兵力の上に兵器開発に勤しみ、投石器などを作っている。

昔の話で赤い彗星を思い出したが、この世界にはアニメは無い。

明との小競り合いは続いている、はっきり言えば明は攻め込んで領土を奪うより、攻め込ませ地理を把握した場所で戦うことを戦略として選んだようだ。

それは非常に不味いことになる。

現在の兵力では兵に酷だ。

レインに頼み、集めてもらって次第に募兵に集まりはじめ、合計十万、明に対抗できる兵力まで上ったが、今度は物資不足に陥った。それが半年続き、兵の士気は激減したが、古参兵達が奮い立たせ士気を維持してただけに、助かった思いだ。

「やっと届きました」

「半年待ったよ」

「機関銃、対戦車ライフル、バズーカ、手榴弾、サーベル、リボル

バー、ボトルアクションライフル」

「弾薬は」

「十二分です、戦車、カノン砲、騎馬、装備類の弾薬です」

琴音は大興奮、相当酷だったらしい。

「後は河川の街道事業だな」

「十分可能です」

「よし任せた」

「また眠れぬ日々が」

こうして明までの海岸工事が始まり、戦車を投入したことから、工事を行なう車両が研究され始めた。

才能ありと判断され幕僚長ながら大佐まで昇格した琴音。

十万人を投じた工事は一週間程度で完成し、十分休暇を取って進軍した、明の軍勢が南に向いている背後を衝いたことになる。

殆どの町や村は制圧され、明制圧作戦殆ど抵抗も無いながら、終わっていった。

何とか間に合った五万の明軍の騎兵が明の首都に立てこもり、それを包囲して絶え間なく砲撃を行なった。

砲撃もあり一ヵ月後食料が付き降伏した、明の崩壊で各勢力は降伏、シラーに似た措置が取られた。

十八の地域から、州制度を導入し、知事を中央から指名した。

ウィラー提督が大提督に昇格し、内海を統一し、今までの海賊や独占していた商人組合は滅亡した。

三分の一を手中に収めたが、真孤の目的は統一の為に北部統一軍団、中央統一軍団、南東部統一軍団を創設し、今までの功績から陸海の

人事異動が行なわれている。

戦乙女騎士団と話し合い、ファシナトゥールを含めた北東部、北部中央の勢力を条件付降伏に持ちこんだ。

北部統一により3の州が新たに加わり指名された知事が、行政を取り仕切った。

残るカーネルア、ハーレー帝国、スレイプニル、リザート帝国、軍団が三個結成され、北部統一軍団を任された、残るはリザート帝国を前に三つの州に制度を浸透させ国力の差から降伏を迫った。

半年間北東部に居座り、降伏を促しながら制度の浸透を図ってきただけに、効果もあって幼児が通う寺子屋に子供が集まり始めて、巧く行政が進み始めた。

リザート帝国が降伏したのは723年の夏だった。

直ぐさまハーレー帝国への街道を建設した。

論説が完了した秋、十万の軍勢がリザート帝国の街道を渡りハーレー帝国と対峙した。

「ハーレー帝国軍二十万の様子、火縄を装備している模様」

「下がって良いぞ」

「了解しました將軍」

伝令兵が下がる。何と無く機になったので幕僚長に聞いてみる。

「どういふことだ」

「人徳ってやつ、極力戦争はしないし、兵は労わるし、一夜は人気があるのよ」

「そうか、なんとも奇妙な話したが、砲撃で叩け、突撃してきたら機関銃で応戦しろ、その辺は任す」

「もちよ」

すぐさま命令が下り陣地から砲撃が始まる、圧倒的な火砲に敵軍は不利を悟り突撃してきた、それを陣地の機関銃を持つ歩兵が応戦する。

今度は圧倒的弾幕に突撃してくる敵兵は屍を築いていく、時折戦車の砲撃が聞こえる。

「兵を両脇に揃えておけ」

「了解したわ」

陣地の壕を辿り両脇に揃えられる。

程なくして騎兵が見えた、機関銃の弾幕から次々と倒れ、この戦いでハーレー帝国は兵力の四分の三を失った、残りは撤退し、ハーレー帝国の領土を攻略していった。

二手に別れハーレー帝国を攻略し残るは帝都のみになって包囲した。

724年夏、ハーレー帝国皇帝自害、ハーレー帝国降伏。

同年カーネリア降伏、スレイプニル降伏、統一したことになる。

フロンティア大陸攻略作戦決行、百万の軍勢を十個の軍団にわけ、上陸させた。

同年冬、東部を攻略。

翌年725年夏西部を攻略、小島や島は降伏。

首都をプリズムロースに移す、平安京と名づけ、様々な種族が平民や領主、知事になる。

軍団二十個を創設、それぞれ地方から中央を巡る騎馬隊が主力である。

翌年、魔導師育成が完了し軍に魔導師が入る。

魔導研究から成果が報告される。

魔導具を軍事的に有効なものを大量注文、同時に少数生物の保護を定める。

軍事開発及び研究所から報告が上がる。

今の機関銃から25年式突撃銃に世代交代。

飛行機計画実用段階、対空砲計画実用段階、潜水艦計画生産開始。
電気が発明されると同時に水素電池が発明される、電子機器が作られ始める。

時代は二十世紀後半の地上、飛行機が生産され始め、国営から民間も参入できるようになる。

弾薬は久遠家直轄事業になる。

騎馬隊用に25年式カービン突撃銃が生産され始める。

25年式戦車第三世代に移行、25年式の歩兵戦車、騎兵戦車、自走式対空砲、野戦砲、機動追撃砲、自走榴弾砲、多連装ロケット、艦載機の生産が始まる。

730年、他の大陸から進軍した軍勢をウィラー大提督率いる海軍が打ち破り、それを記にウィラー大提督は退役する。

翌年、世界が一変する。

第四章統一と異変（後書き）

一 応天下統一後の予定です

第5章 異変

第五章・

「報告します

異大陸の貿易船が消えました」

「何？」

「気象もおかしくなり、観測所から世界が転移したと報告が上がっています」

「疑うが、誰かが時空魔導でも使ったと」

「私見ですが恐らく」

「分かった首都に向かう軍団は移動を開始してくれ」

「了解しました」

伝令兵が下がり、直ぐに参謀長で婚約者の琴音が来た。

「どういうこと」

「どこかのバカが時空魔導を使ったかもしれない、決まったわけじゃないが」

「そのバカをとっ捕まえるわ」

「その前に首都へ移動だ」

「はあ分かったわ」

珍しく激怒を抑え参謀長として今だ板付かないが、それでも有能な参謀長は早速幕僚達の元に急いだ。

数時間で移動を開始してさすがに統一して5年、制度も普及し個人的に好き嫌いはあるが、様々な種族が居るために差別意識は年々薄まってくる。

統一を期に魔道師を雇う者は自らが魔導を習う者で、僕も暇さえあれば軍の魔導師に教えを受けている、さすがに五年経つので一人前の正規魔導師。

丁度旧ハーレー帝国の残党狩りをしていたためにいち早く戻れた。印刷機は発明され、新聞は有る、首都に戻ると琴音を連れて会議室に入った。

「やれやれ足の遅い弟だ」

「姉さん冗談はそこまでにして現状は」

「異世界だ、とある魔導師が異世界に転移させたらしい、その後絶命、その弟子から報告を受けた」

「ウィラー提督を復帰させて海軍を使い調査させるしかないね」

「うむ、今回の調査をウィラーに一任する」

一月後のウィラー提督の帰還。

「申し上げます、異世界なのか未知の土地なのかは分かりませんが、近くに内乱中のボトルアクションライフルが最新の銃が主流の国家です」

「ふむ、それで我々はどこだ」

「西部です」

「侵攻計画を練よ」

「理由をお聞かせ願えませんか」

「非常に簡単じゃ、異なる種族同士暮らしているが、その大陸は一つ種族じゃろ」

「つまり一員になるために戦を起こすと」

「要すればそうじゃ」

「私も軍人です、承りました」

異なる地域の異大陸に住む人々に哀悼の意を祈った。

姉の冷静な決断はよく分かる、今のうちに力を身につけなければ負けるのが必然だと。

731年、皮肉にも僕がレプリケーターを完成させた翌年のことだ。一年かけて計画を練り、陸海軍延べ十萬が第一軍として内乱国の海軍を壊滅させエアリーズ諸島を攻略し、世界地図を手に入れて貿易可能地域との貿易が可能になった頃だ。

732年。

「最初にアルサを攻略して南のプロセルビナ・ノルド、北ウエスタントカリスタに分かれ進軍しよう」

「私に北を任せてもらえませんか」

一人のエルフ将校、階級は大佐、それに賛同するように若手が手を上げた。

よく考えたが、経験もあると判断しウィラー提督に援護を任せ、任せた。

南の本隊ではなく戦車1個連隊、自走榴弾砲、機動追撃砲の兵器群に騎兵隊街道が整備されているので迅速に進軍し、敵軍の砲門から出される砲弾を戦車が弾き返し、自走榴弾砲が榴弾で敵軍の城壁を破壊していく、最後に騎馬隊が進軍して一つの拠点は攻略された。

その方法で三つを攻略し、三箇所に分かれている地域を攻略し、後は山の麓、一つずつ攻略し圧倒的な火力で粉碎した。

9ヶ月を要し、ウエスタントカリスタを攻略した本隊と合流した。

それは翌年の四地方を攻略するのに一年を要した。

留守を琴音に任せ、いったん本国に戻った。

「以上の報告です」

「分かった軍団許可を許す」

「第二軍の用意もしておいてください」

「分かった、しかし意外に時間がかかるな」

「意外に広いんだよ、この大陸と同レベル」

「ふむレプリケーターが作られてから魔導師が小学校から教えるので言ってきたので許可した、低コストで作られるために、人員を育て兵器を増産するか」

「そうしてくれ希少種族はなるべく戦場に送らないでくれ」

「理解した、そろそろ行け琴音が心配しているのが手にとって分かる」

「分かったよ」

戦場に飛行機で戻った、現在は偵察と輸送に使われている、まだ真新しい技術だからだ。

飛行場に到着するとゆっくりと降り、久しぶりの飛行機で懐かしく思えた。

軍団許可を持ったので攻略地を一時的な統治権を持って、それぞれの町に騎馬隊から守備隊を配備して給与は同じくした。

州を統治する政治、統率力、指揮能力に秀でたものを知事に指定した。

ヤーロパ公、南ヤーロパ連合と不戦を仲介して結び、カリスタ攻略に乗り出す。

大河が通っているが、輸送艦が通るので精一杯で旧式な帆船で物資輸送を行なった。

ウェスタントカリスタにエルフに、将校のライフ・ノアを配置している、後方に憂いは無い。

こちらの年号で言えば258年らしい、カリスタは二大勢力のらみ合いが続き、カリスタ侯の後ろをつく形になる。

捕虜は本国に送り十万の兵力のうち四万を統治下に地域に、残るウイラー提督艦隊が一万名、五万の兵力でカリスタ水門を包囲して歩兵に突撃させあっさり攻略した、守備に1000名を残し、そこから二箇所に進軍し、カリスタ侯は慌てて和平の話を持ち出したが、受け入れる必要もなく、圧倒的な戦力でカリスタ侯爵家を滅ぼして捕虜は本国に輸送した。

五ヶ月で攻略し、他の統治地域に国家制度を適応し、市民の反響は微妙だった、彼らからすれば未知の種族からの侵略行為にしか見えない。

懐柔策として税を今年は無くし、それがやっと農民達の支持を得た政策。

町々の税金も半減させ、何とか募兵に集まるようになった。募兵に集まった者は本国で訓練を受け、第二軍に編入させることになる。

カリスタ攻略は山場で、今まで補給線から守備隊、輸送護衛に併せて二万を投入しているために、手元には3万しかない。

参謀達は忙しく3万で東方8箇所、南に六箇所、半々に分けても実質的戦闘員はその半分の為に7500名程度。

兵器を有効に扱わなければ攻略不能だ。

「参謀長、いや琴音、どんな具合だ」

「難いわね実質的な戦力は半分の一万五千、それを分けたら苦戦は必死よ」

「南から攻略しよう」

「残るのは」

「一万」

「致し方ないわね」

その方針で南方の盆地を攻略することになったが、慣れない土地柄に兵の疲労は蓄積している。

南の攻略は予想外に容易かった二万の兵力に敵軍は混乱し、戦々恐々で降伏した。

その為に守備隊を残してケイニクラに戻り、来年までの休暇を与えた。

翌年733年、この大陸の暦で読めば253年。

善政と略奪などをしない軍隊の為に、募兵も集まり義勇兵も集まった。

本国で訓練を受けた、この大陸イシスの兵も第二軍として到着した。数延べ二十万、その内工兵を使いレールを引いてアルブ・プリオ、メクラを通じる工事を行い半年掛けてトンネルを作った。それにより交易は良くなり、輸送も容易くなった。

統治下の民にも歓迎し始め、募兵にも効果覿面だった。

そこまで兵力にこだわるのは、戦争の決め手は質もありながら数もバカにならない。

第二軍は第一軍と再編し、三十万の兵力のうちカリスタ攻略に一万、守備隊に総計6万、補給部隊は次に来る第3軍に任せ、24万を西部統一に北上させることに決まった。

第六章 帰らずの山

第六章

タイダケ市に総司令部を置いて十万を二万ずつに分割して南連合攻略、一万を残し、残りは公爵を攻略する、総司令部で攻略報告を聞きながら、自ら陣頭に立てないもどかしさから葉巻に火をつけていた。

「また葉巻、そんなに現場に出たいの」

「当たり前だ総司令官なんて柄じゃない」

「こちらは総参謀長よ、めんどくさい」

「酒が増える」

「もう四年よ、本国が懐かしいわ」

お喋りするほど暇なのだ、戦慣れした古参兵に指揮官に幕僚が揃っているために、非常に楽な反面、総司令官は暇なのだ。

物資も豊かだ、レプリケーターのおかげで、物資に困らない量が送られてくる

半年後、南連合は崩壊し無条件降伏した、ヤーロパ公は自害し、残りは捕虜になった。

半島はウィラー提督が攻略し、カリスタも攻略し終えた。

残るアルクトウ伯、アルワイド家、自由都市、アルマー家、アルゲデイ家も攻略対象。

戦線が意外に広く伸びきったためにヤーロパ、アンブレオン、シュヴァイン、西方半島が統治下に入り一年間無税措置が取られた。制度を適応し、知事を配置し、一万を配置する。

一年後、やっと3家、自由都市、アルワイド家の遠地、51箇所に

千名ずつで5万1千名が守備隊に置かれた。

問題はどの家も技術者を逃したことだ、おかげで技術レベルが未だに曖昧だ。

四年と半年で西部統一、カロン辺境伯も攻略し西部は完全に統治下に入った。

おかげですることが半端ではない、インフラ整備、戦後補償、兵の褒章、人事異動、軍の再編、第3軍が来ていたので補給面の心配は無い。

古人曰く戦争は最終経済だ。

つまり長期の戦は国を滅ぼし、短期の戦は国を豊かにする、そして長期の戦で勝った国はない。

問題は沢山有るが、東部をアルワイルド家が大勢力化し、いくつかの地域を統治下においている。

東南部ではソーマ公が通商圏を破り、破竹の勢いで東南部を制圧している。

内陸部ではキャストル家がスマトラ・アズブルーに迫っている。

そんな東部の事情もあるが、二年間政務に勤しんだ。

740年の六月、こちらで言えば260年。

西部のインフラは終わり、制度から半分国民の手にあるので反乱の頻度も少ない。

激的に変わった国土から明雌雄の支持率は半々と言ったところだ。

貴族の居ない王家と国民のみの国家として認知されている。

西部には合計五十万の兵力があるが実際動かせるのは三十万、訓練をしている兵士が二十万、それが終われば圧倒的な物量と兵器で攻略は容易い。

だが、そんなことには関わらず、盗まれた機関銃がコピーされ、あつという間に普及した。

それから機関砲、機関を使った兵器、決断のときと言える。

ブローキューア方面に二十万を俺が率い、ハイラディ方面に五万をウィラー提督、デアラーニ方面に五万にライフ・ノアが率いる。

二十万の訓練兵は十万がゲアラニ方面、五万がハイラディン方面、五万がブローキュラ方面に増員になる。

それも一ヵ月後、それを待たないのは今しかないからだ。

「各員の奮闘を期待し、無事を祈る、東部制圧作戦開始」

25式主力戦車が先鋒を飾り、後方に自走式などが走る、歩兵などを運ぶ輸送車両はもちろん装甲車。

25式主力戦車は日本の10式戦車に近いが、主砲は44口径120mの第3世代のまま、アクティブサスペンションは他にも流用され、フルード・カップリング流体継手の様に流用され、様々な車両兵器に役立っている。

指揮車両、水素電池が使われた電気モーター車両、一応7・62mm機銃が着いているが、巨大なバスのように通信兵が現在地からポイントを幕僚が指示している。

「攻略は着実だな」

「基本に忠実ですけど」

「戦車砲で城壁破壊、ナノカーボン繊維の戦闘服の歩兵の投入、歩兵の装備は25年式突撃銃にロケットランチャーで制圧」

「敵兵が哀れね」

「アフフが陥落しました」

「守備隊を配置して進軍」

「了解しました」

西部からの砦であるアルフが陥落したことで、ついに異民族が東部に進軍することを恐れた北東部の勢力は連合を組み、アルワイド家と不戦を結び、連合で挑もうとした。

それが大変な事態に陥ることになるとは誰も思わなかった。

深い霧が立ち込めた山岳路、両軍が鉢合わせてしまったのが04…00

出合いがしらに兵卒が発砲、機関銃の為に三秒足らずでマガジンが切れた。

しかし前方は戦車師団、気づいた前方戦車の指揮官は古参兵で直ぐに無線連絡をよこした、それが切欠になり、両軍視界不良の中で交戦が始まったが、敵兵が何所から来るのか分からないために半円を両軍が展開して激しい戦闘が始まった。

そこには近代戦もあるわけもない子供の殴り合いのような反撃と反撃だった。

僅か一時間で東北連合は歩兵が壊滅的な打撃を被り、前方の戦車が想定していない自走式機関投石器の石の質量で破壊され、師団は痛手を被った。

東北連合が後退しサーリンまでもどるまで、敵が居ると思い攻撃を続けていた、それが砲弾などの物資の浪費につながり、後退するかなかった。

「珍しい失態ね」

「言い訳、音で判別できなかった」

「でも笑えないわ、物資はいいとしても戦車が想定していない上部からの大質量の投石攻撃なんて」

「記録によると毎分二十個、明らかに機関が使われている」

「現地人がバカじゃないことが立証されても、被害は痛手よ」

「飛行機だな」

「海軍航空隊はウィラー提督の指揮下よ」

「へりならあるだろう」

「こんな高地で？」

「航空戦力が欲しいが無いなら霧が晴れたら、榴弾砲で破壊するしかないな」

「それまでは？」

「歩兵戦力だ」

「幕僚が忙しくなるわ」

一番の問題は別のところに有る、高地ゆえに高山病が続出、歩兵的にも半数がかかって薬が品薄気味になってしまったことだ。

幸いなのはどちらも似たような抗体を持ち、病気が蔓延しなかったことだ。

どこかで繋がっていた証拠なのかもしれない。

730年七月、物資を過剰に集め、ガスマスクを被った歩兵が前進し、騎兵が前方を偵察している。

東北連合は歩兵の壊滅的な打撃を自走式機関投石機でカバーしようとした、それは正しく、しかし経験が足りていなかった。

至近距離まで朝霧の為に発見できず、歩兵によるバズーカによって城壁が破壊され、各所に穴が開いた結果、騎兵が突入し、歩兵も突入した。

歩兵の少ない上に機関銃は重く、小回りが利かなかった、それに対しFN2000のような軽量の25年式突撃銃で死傷者が続出したそれでも戦ったのだから、勇敢でもありまた悲劇でもあった。

戦力の9割を失った東北連合は技術の全てを王家に託し、技術者を逃した、後は時間を稼ぎながら外交的解決を模索すると判断した。だが一夜はもはや継続して戦うだけの戦力の無い連合軍だと判断した、それだけの死体が埋葬されたからだ。

別名帰らずの山と呼ばれるようになったのはこれを期に

第七章第一部終章

第七章

訓練兵が増員として輸送され、延べ二十五万に膨れ上がった戦力は東北連合に浸透作戦を開始した、外交官も来たが、話すことは無いと帰した。

実際のところ読み間違えれば多大な被害を被っていた、しかし読みは当たった、守備兵と呼んでも100人程度、勝てるはずも無く次々と陥落した。

戦車は平原で最大の長所を引き出す、その主力戦車の性能は完全にイシス大陸の技術者を唸らせるものだった。

砲撃で城壁を破壊して、それから歩兵が突入するパターンで攻略し、もはや東北連合に反撃の力は無かった。

一方ハイラディンを攻略し終えたウィラー提督は増援の5万を持ってアルワイド家と決戦をしていた、とはいっても現代兵器に造詣の深いウィラー提督は自走式を騎兵のように使い陣地に固定せず、両翼から榴弾を撃ち込んでいた、その為にアルワイド家三十万は完全に陣地から動けなかった。

エルフの若き鷹と称されるライフは十万の兵を持ってキャストル家を滅ぼし、ソーマ公と善戦していた、ソーマ公総軍延べ40万、十五万で戦うので精一杯だと言っても過言ではない。

その状況下で東北連合の敗北は、アルワイド家に重大な打撃に近い重石になった。

ハイラディンのウィラー提督率いる10万、東北連合を下した一夜率いる25万、その挟み撃ちになる。

陣地から逃れられないアルワイド家は無力だった。

カルターニャ、フリア・ロハ、レ・ブルヴァ、ブローギュラの四地方を落とした

イシスに進軍すると王都を無視してアルワイド家の後方に位置し、支援を行なった、意外に戦意は崩壊しアルワイド家は降伏した。

「ウィラー提督お久しぶり」

「久しぶりですね中将」

「このまま海岸線の北東部に向かってくれついでに王都攻略」

「分かりました」

そのままアッズーラを攻略、後は南下するのみでルネール公を下し、デーニツシュ候を下しソーマ公へ挟撃に出た。

ソーマ公は降伏し、無線でライフと交信して労い残りの箇所を攻略するように命じた。

バカラ諸島を攻略し、取って返すように北上したアルリシャで止まり、送られてきた第四軍を守備隊に回しつかえる者を知事に指名した。

造船所で輸送艦を建造し歩兵を持ってユピター島を攻略した。

王都が陥落し王家は降伏した。

これによりイシス大陸のイシス連邦王国は完全に落ちた。

復興事業にインフラ整備に五年かかり、兵の多くが帰還した。

本国に帰還すると英雄扱いで、僕はそれを嫌い止めるように言った。

それから他の大陸を調べていくうちに、元の位置が分かり、今では

諸島と島があるのみ。

それから時は経つ。

宇宙時代まで生きて天命を全うした。

実に400歳の年齢だった。

「御主か」

白鬚の仙人のような人物がまた居た。

「残念じゃのう、今度は別の惑星じゃ」

「なかなか消えませんね」

「何、わしも似たようなものじゃて」

「そうですか、何と無く達観しますね」

「じゃろ」

「今度は何所に」

「今度はのう選ばしてやろう」

いくつかの世界が球体で現れ、その歴史の一部を知った。

「では廃藩置県前の琉球王国へ」

「よかろう」

そしてまた転生した。

第七章第一部終章（後書き）

主人公が活躍します

第二部、新たな生として

第二部琉球からカオス大陸

生まれてから成人の十五歳になる頃、何とか理解し始めた、主な産業は農業で南西諸島の琉球王朝の長女の弟つまり長男、その頃にレプリケーターを作り出し、それから生み出される無煙火薬や様々な資源、それにより薩摩からの支配に抵抗し成功した、次は清王朝だが、やるが多すぎて手が回らない、若き獅子と呼ばれたが、レプリケーターのマシン版、フード版、資源版を作り、富国強兵に乗り出し、日本が明治政府で今まだ侵略できない中、台湾を占領し、清王朝はどのみち倒れるので無視して、東南アジア、オセアニアに進軍し完全に手中に収めた、年頃は二十五歳、日本政府、新王朝は無碍に扱えない国家に成長し、いち早く立憲君主制を導入した。

滅ぶはずだった琉球王朝の変化で国際情勢は変化した。

日本と同盟を結び、蝦夷をアイヌに返すことが決まった、同時にアイヌとも同盟を結び、大量の蒸気船、軍艦を作り、徴兵してインドに攻め込んだ、五年掛かり何とか手中に収め、病院、学校、そんな近代的な施設を作り、その人員の育成も始まった。

それが終わる頃に五十歳、竜王と呼ばれた。

首都をインドシナ半島に建設し、インフラ整備で莫大な資金と資源を投じて全領土にインフラ整備を行なった。

イギリスは大艦隊を率いて進軍したが、それを上回る軍艦で勝利を収めた。

60歳の頃である。

チベットと同盟を結び、西アジアと交流を活発にした。

欧州に植民地を無くすように迫ると大艦隊を率いたが、それを上回る戦力で片付けた。

アフリカ全土を開放し、アフリカで大陸規模の灌漑、植林を行なった。

80歳の頃完成し、アフリカに技術者や教育者を派遣して、知は力なりを教えた。

90歳の頃、日本政府はロシアに勝利して、清王朝も末期に近い。

王位を優れた姉の子孫に託し、引退し、秘術を使い転生したが、失敗のようで老人に会い、同じ地球に生を受けた、今度は大西洋に突如現れたカオス大陸の妖孤として、よくよく妖孤に縁があるらしく、生まれてから百年間村で暮らしていた。

アメリカ、日本、から攻められたが魔導力で跳ね返し、結界を張った。

魔の森ジェーへで妖孤を扇動し挙兵した。

「おうおう少ないな」

「いたし方あるまい、元々少数だったのをレプリケーターで作り出したのだから」

「であった、行くぞ」

現存の兵力は僅か三百、砂漠の町に進軍し、何とか徴兵することが出来た。

陽空要塞バルトを説得して協力関係を結び、何とか兵力を身につけた。

鳥から進化したフェザートルクという人種らしい、様々な色の翼が特徴的だ。

今度は南下して聖天モモンクを下し協力関係を構築した。
次はモバブを下しこれまた協力関係を築いた。

120年の出来事だ。

組織戦と呼んでも小数の戦いしか分ならず、帝魔軍を滅ぼして、北上し、砂漠の町、砦に兵力を集中させ、主な将を配置して、国政に取り組んだ、まずは無煙火薬、次にボトルアクションライフル、次に機関銃、次に突撃銃といった具合で歩兵装備は成長し、拠点は海洋にバズーカを配備した、この大陸で銃は珍しくはないらしいが、軍隊に採用するのは珍しいらしい。

大砲から自走砲を作り、騎兵を育成し、延べ一万の兵力を育成できた。

科学技術を浸透させ、魔導も取り込んで、技術の集大成を初等部、中等部、高等部、大学、大学院、陸海士官学校、軍事学校、病院を各地に建設し、男女別に分けた。

砂漠の町を首都に置いたために、協力関係のアグル、モモンク、モバブとレールを敷き蒸気機関車で公共輸送機関を建設したのが、効果覿面だったらしく、積極的に技術を受け入れて行った。

国家として税収は無ければ不自然なので僅かに納税させ、代わりに国家的サービスを提供した、それが良かったらしく協力関係から主従関係になって勢力として纏まりを見せた。

130年、大陸が戦乱の世になると、在野の者が仕官するようになり採用していった。

「皆さん今後の方針ですが、ゼノン魔法兵团を目標に、ゼノン教国を倒す良いですか」

「特に問題は無いでしょう」

「私もそう思います」

「私としては戦えればそれに越したことは無い」

「好戦的な一部を除き結構それでは作戦会議を開きます、幕僚長」

強力関係だった勢力の代表者は女性が占めていたのが肩身が狭い、軍師が同族の男性だから、なんとか拮抗する。

話し合いは数日間続き、セノン教国までの作戦が決まった。

その名も砂漠の嵐作戦。

砦にアグルのルフルの指揮下に五千の兵を置いた。

進軍予定の一個師団、歩兵、騎兵、砲兵の3科、元々飛べる飛翔兵のフェザートルクは偵察兵の役割と、手榴弾などの投擲兵の役割を持つ。

相手も進軍予定だったらしく平原に兵力を配置していたが、一個大隊程度。

飛翔兵の投擲でかく乱し、騎兵の突撃で士気を崩落させ、追撃を続けて壊滅させた、死体は丁寧に埋葬し、そのまま進軍、魔法兵団は教国、レジスタンス、鉄人兵団に囲まれ、防戦一方、シュタード砦を陥落させ、スサノオを平原に一個連隊を置き、リンズ浜を攻略して鉄人兵団と和平を結び、資金提供の代わりに軍門を下るように言えばあっさりと軍門を下って大学院の研究所に入った、相当の変人のよう。

レジスタンスに公国の復興を提案し、同盟関係を結び、勢力化に置いた。

小島のキャスティ兵団、ソセディアを攻略し、その間に教国と魔法兵団との激戦で魔法兵団は押され気味になり、拮抗したところを公国が南下、スサノオが北上しゾボス砦を包囲、リーグ高原を攻略して、そのままスサノオと合流、歩兵のバズーカで城壁を破壊して、飛翔兵で催涙ガスを投擲し、混乱したところで歩兵の突入、砦が陥落したのは直ぐだった。

ロンド峰で砲弾を撃ち込み三つ巴で両軍に打撃を与え続け、両群と衝突する頃に後退し、両軍がにらみ合ったときに進軍して砲弾を撃ち込んで、両軍が合同で突撃してきたら陣地の歩兵で壊滅的な打撃

を与えた。

そのまま魔法兵団を壊滅させ、教国の輸送船を強奪して上陸しガルゼラン砦を陥落させた。

グラマ、レモを攻略でき、戦力が整わないうちからトケルゴア砦を陥落させた。

残る神都セノス、バットローズを降伏させ、大陸の三分の一を治めた。

それぞれの町や都に行政に優れた武将を配置して、砂漠の町を都に変え、様々な種族、民族が集う人種の坩堝と化していた。

一旦軍を再編し、今後の方針として話し合うことになった。

「2年で三分の一ですか」

聡明で見た目美しい美貌を持つが、苦手な聖職者のようなアグルの代表マリファラ。

「今後は内政に取り掛かりたい、皆の意見は」

「そうですね」

色々と意見が出たが、基本的には僕の判断で終わり、屯田兵が採用されたのが代表的だ。

三十以上の拠点があるために、インフラ整備もバカにならず僅かな税金から引き上げるしかなかったが、元々格安だったため、反論は無かった。

八年掛け、インフラ整備を整え、学生という立場が珍しくなくなったのが、昔からの武将達には斬新だったらしい。

軍事学校から卒業した兵士、そのまま士官になった者、士官学校から入隊した者まで軍備拡張は続けていた。

経済的投資、自警団の創設、法律の制定、仕事は山ほどあったがそれを分けることが出来る文官も揃い始め、何とか凌いでいた。

さすがに君主は面倒だとは言えない、そしたら立場的に殺されそう。この十年間で国家的勢力圏を作り、礎を築いたために、軍部の押さえは厳しくなっている。

「あれ」

「気づいたかのう」

「もしかして」

「そうじゃ、軍部の暴走でお主は暗殺された、毒殺じゃ、しかし地球も大変な時期じゃよ、太平洋北部にカオス大陸、南部にイシス大陸、インド洋にフロンティア大陸、大西洋に久遠大陸、どこもかつての技術力は無い、戦乱によって技術力が低下したのが原因で、今では戦乱のさなかじゃ、お主には第2次世界大戦まで生き残ってもらわねばならぬ、今一度久遠大陸に戻そう」

「一つ質問しても良いですか」

「かまわんぞい」

「姉や琴音、母さんは」

「いるぞい、妖狐の集落で暮らしておる」

「良かった」

「また妖狐の生を受けよ」

「最後に貴方は」

「輪廻の番人じゃ、元は地球に居た仙人じゃが」

気づけば赤ん坊で母親の狐音によくよく抱かれている、しばらくは気楽な生活が出来そうだ。

第二部、新たな生として（後書き）

地球の激動が始まります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5895z/>

転生者の戦記（旧名も無き詩の戦記）

2011年12月20日17時01分発行